

金沢市のアメリカシロヒトリ 駆除政策の変遷

今年もアメリカシロヒトリが孵化する季節になった。以前、金沢市ではアメリカシロヒトリの駆除のために農薬の一斉散布が行われていた。町内に拡声器で「アメリカシロヒトリの駆除のため薬剤散布を行います。洗濯物を入れて、窓を閉めてください」と流された。

1999年、このような一方的な農薬散布に対し、金沢市の中登史紀さんがアメリカシロヒトリについて調べ、散布されている農薬についての分析を行い『アメリカシロヒトリの駆除について考える』一都市の居住環境の快適性(緑化)と安全性(化学物質)は両立するか—という冊子を自費出版した。この冊子は県や市の緑地管理課や市の町会連合会に寄贈され、市長宛に、以下のような「アメリカシロヒトリ駆除の農薬散布に関する提案」を提出した。

金沢市ではアメリカシロヒトリ駆除のために毎年、大量の農薬(有機りん系殺虫剤)が散布されている。この農薬は低毒性であり、発ガン性もなく、分解が早いので比較的安全であるとされている。しかし、農薬であり、多少の違いはあれ、毒物に違いない。

農薬は農耕地の限られた空間で適正に使用することによって必要な安全性を担保されているものに過ぎない。農薬はいわゆる「安全性」の一部を担保しているに過ぎず、環境ホルモンの働きはあるか、変異原性はあるか、複合毒性はどうか、不純物に問題ないか、化学物質過敏症を起こさないか、アレルギーを悪化させないかなどについてはほとんどわかっていない。したがって、安全な農薬と言っても都市空間で安易に大量散布することの安全性が担保されているわけではない。

また、駆除の対象となる害虫「アメリカシロヒトリ」は、アメリカ楓やサクラなどの葉を暴食するが、樹木が枯れるわけではなく、人に害を与えるわけでもない。適当な時期に葉を切り落とし、踏みつぶせばほとんど問題は解決する。冷静に見れば大した害虫ではない(アメリカシロヒトリを恐ろしい害虫のように誤解している住民が多い!)

化学物質の多用がどのような結果をもたらすか分からないだけに、その恐ろしさはアメ

リカシロヒトリの比ではない。このような観点から、都市空間での農薬の使用は必要最小限にとどめるべきである。安易な農薬の使用によって、都市住民の健康と安全を脅かすような危険性が存在していることに対して警鐘をならす。

当時、人口規模が金沢市とほぼ同じ岐阜市、「杜の都」と言われる仙台市の樹木害虫駆除経費を比較すると、金沢市は、岐阜市の36倍、仙台市の約13倍(人口・宅地面積あたり)と突出した防除費用を使っていた。県が兼六園などに散布する農薬量を加えると、市民の農薬被曝は、さらに大きなものになっていたのだ。

この冊子の出版をきっかけに、周囲の人たちも巻き込み、市民運動となって広がっていった。その後、金沢市は政策を大きく変換し、その変化は神奈川相模原市のNPO「建物と人と環境のフォーラム」のウェブサイトにも現れていた。

「環境循環型まちづくり 金沢市」

金沢市は、全国でも珍しく公園・学校・街路樹等への農薬の散布を禁止し、剪定や捕殺による病害虫防除に切り替えた先進的な自治体です。またやむを得ず農薬を使用する際にも農薬の害などへの厳しい監視を課しており、その実践のうえで得られたデータは他の自治体や関係者にとって大変貴重なものとなっています。当NPOでも、ツアーを組んで金沢市の先進的な取組について研修をさせていただきました。

一市民の起こした勇気ある行動が市の政策を変換させるきっかけとなった。彼の行為は必要なときには行動を起こすことの大切さを教えてくれたように思う。



※この冊子は当会に在庫があります。ご希望の方にはさしあげます。ご連絡下さい。